

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16918

研究課題名(和文) 財政関係木簡による古代地方社会の実態解明

研究課題名(英文) A study on the actual image of ancient Japanese communities in the provinces, from an analysis on wooden tablets written on financial affairs

研究代表者

山本 祥隆 (Yamamoto, Yoshitaka)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：50610804

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まずは全国の木簡出土事例を網羅的に集成し、また木簡出土遺跡の現地調査や実物資料の熟覧調査を実施するなど、研究基盤の構築を行なった。その成果に依拠しつつ、資料の熟覧調査から得た知見に基づく論考や公出挙制に関する考察から古代地方社会の実態解明を企図する論考を公表し、他にも学会報告や講演会を行なうなど、多くの成果を多様な形式で発表した。

さらに、都城遺跡出土木簡の調査・研究や関連テーマの研究などとの相互関連を図り、多彩な成果を論考・学会報告・書籍など様々な形式で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

木簡は脆弱な遺物であり、実物を調査する機会は研究者でも限られる。また、木簡は考古遺物でもあり、考古学的知見も必要という扱いの難しさもある。

一方、平城宮・京跡の発掘調査および出土木簡の調査等を本務とする私は、発掘調査の現場に立つ機会や木簡実物を取り扱う機会に恵まれている。その経験を活かし、全国各地の木簡実物を調査しながら挙げた成果は本研究ならではのものと言え、学術的意義は大きいと考える。

さらに、関連諸テーマとのリンクも図りつつ、一般向けも含めた広範な調査成果の公表を図るなど、大きな社会的意義も果たしたと考える。

研究成果の概要(英文)：At first, I collected examples of wooden tablets excavated from the whole of Japanese sites as many as possible, explored some sites from where wooden tablets were excavated, and examined the real tablets excavated from these sites, in order to solidify the foundation for my study. Then, depending on this foundation, I published some papers which is based on results of the examination on the real wooden tablets, and some theses on ancient Japanese provincial society from the analysis of a kind of financial systems called "Kusuiko". In addition, I presented the results of my study at some conferences, and gave lectures on some meetings.

Furthermore, I tried to connect my study with examinations on the wooden tablets excavated from ancient Japanese palace sites, and some studies on which are related to my study. And I announced various results of my study in various ways; papers, presentations, and publications.

研究分野：日本古代史

キーワード：木簡 地方財政 地方官衙遺跡 平城宮 平城京 年輪年代学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

木簡は、研究開始当初の時点で全国での出土総点数が 40 万点に迫る、古代史研究に不可欠な一大資料群となっていた。また、その出土は平城宮・京跡などの都城遺跡に留まらず、全国各地に所在する古代地方官衙関連遺跡(以下、地方遺跡)からも、出挙を中心とする財政関係木簡など数多くの木簡の出土が報告されていたところである。

一方、古代地方社会の実態を探求するに際して、木簡を十分に活用した研究は、手薄と言わざるを得ない状況であった。これは、

(1) 木簡は文字資料であると同時に考古資料でもあり、十分な分析には文献史学・考古学双方についての知見が求められる

(2) 木簡は脆弱な遺物であり、研究者であっても実物に接する機会はきわめて限られるといった、木簡の研究に伴う一種独特の難しさによるところもある。

私自身も、学生時代より公出挙制を主軸に据えた日本古代地方財政史の研究に取り組む中で、地方遺跡出土木簡等の分析から公出挙制の実態に迫ることを目指したことがある。その成果の一部は修士論文に組み込むことができたが、当時の自身の力不足もあり十分な分析に至らなかった部分も多く残され、研究の深化の必要性を痛感していたところである。

その後、幸いにも奈良文化財研究所に奉職することとなり、都城発掘調査部・史料研究室に所属し、平城宮・京跡の発掘調査および出土木簡の調査・分析・保管を本務とすることになった。その中で得た経験を活かしつつ、改めて地方遺跡出土の財政関係木簡等を収集・分析し、学生時代以来の研究テーマの深化を目指したのが、本研究を志した背景である。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、公出挙関連などの財政関係木簡を中心に、古代の地方遺跡より出土する木簡を総合的に検討することによって、古代国家の支配システムとその運用の具体像を主として財政史的観点から構築するとともに、それによって支配され古代地方社会の実像、文献資料だけではうかがい知れない実態面に迫ろうとすることである。

また、地方遺跡出土木簡は、公出挙関連資料に限定される訳ではない。財政関係に限っても、例えば田租制や荘園制など、公出挙制とも密接に関連する周縁諸制度に関する木簡も多く出土している。本研究では、これらにも広く目配りしつつ事例を収集し、より豊かな古代地方社会像の構築に寄与することも意図している。

さらに、地方遺跡出土木簡は平城宮・京跡ほかの都城遺跡出土木簡から切り離されて存在するものではない。むしろ、性格的な相違を含みつつ、両者はいわば表裏一体の関係にあるとの評価も可能である。したがって、本研究の遂行は、本務とする平城宮・京跡出土木簡の位置づけの相対化に資するのはもちろん、本研究と本務とを有機的にリンクさせることにより相乗効果を発揮し、両者のタスクが深化することも期待する。これも、本研究の重要な目的のひとつである。

3. 研究の方法

研究の方法として、研究開始当初は大きく二つの手法を考えていた。まずは、全国の木簡出土事例を収集すること。その際、発掘調査報告書や木簡学会会誌『木簡研究』を活用することはもちろん、本務の中で構築した全国各地の調査担当者の方々との人的ネットワークも活かし、最新の出土情報の入手を心がけることとした。

次に、木簡出土遺跡の現地調査と木簡実物の熟覧調査を実施すること。木簡の研究には使用の場を想定しながら考察する姿勢が不可欠であり、出土遺跡の立地や地形、気候や環境なども重要な情報となる。また、木簡は広義の木製品であり、考古資料でもあるため、実物に接しての熟覧調査は何にも増して重要である。なお、この遺跡の現地調査と実物資料の熟覧調査においても、各地の調査担当者との人的ネットワークが生きてくると想定していた。

上記に基づき研究に着手したが、実際に研究を遂行する中で、手法の追加や若干の軌道修正も行なった。すなわち、本研究の成果を本務である平城宮・京跡出土木簡の調査・研究や関連諸テーマの研究とリンクさせることに、当初の想定を上回る有効性が見出されたのである。そのため、上記二つの手法に加え、関連研究との有機的リンクという手法や姿勢も強化してゆく結果となった。

4. 研究成果

全国の木簡出土事例の収集については研究期間を通して作業を継続し、山本祥隆「2017 年全国出土の木簡」(第 39 回木簡学会研究集会、2017 年 12 月 3 日、於奈良文化財研究所) 山本祥隆「2018 年全国出土の木簡」(第 40 回木簡学会研究集会、2018 年 12 月 2 日、於奈良文化財研究所) といった学会報告などの形式で成果発表を行なった。これらは、各年における全国の木簡出土事例を可能な限り網羅的に収集することを目指すことにより、研究遂行のための基礎的なデータの構築を企図したものである。

木簡出土遺跡の現地調査や木簡実物の熟覧調査については、2016 年度には鳥取市の青谷横木遺跡・大楠遺跡・下坂本清合遺跡ほかの遺跡および出土木簡調査など、2017 年度には島根県出雲市の青木遺跡ほかの遺跡および出土木簡調査など、2018 年度には静岡市の尾羽廃寺跡ほかの遺跡および出土木簡調査など、2019 年度には三重県桑名市の柚井遺跡ほかの遺跡および出土木簡調査などを行なった。調査に赴いた主な遺跡は、東(北)は宮城県多賀城市の多賀城跡から西は福岡県太宰府市の大宰府跡にまで及び、総じて、研究期間を通して活発に調査を実施し得たと考える。

以上の調査に基づきつつ、山本祥隆「古代木簡にみえる「勝」の字体」(『奈良文化財研究所紀要 2019』2019 年 6 月) などの論考を公表した。本稿は、熟覧調査を実施した島根県出雲市・青木遺跡出土木簡の難読文字について、同じく熟覧調査にて実見した鳥取市・青谷横木遺跡出土木簡や平城宮跡出土木簡の事例に依拠して釈読案を提示し、そこから地方社会の実像の一端をうかがおうとしたものである。

また、武田寛生・山本祥隆「静岡県尾羽廃寺跡の発掘調査と出土木簡」(第 41 回木簡学会研究集会、2019 年 12 月 8 日、於奈良文化財研究所) などの学会報告も行なった。本報告は、現地調査・熟覧調査を実施した静岡市・尾羽廃寺跡の発掘調査概要、および遺跡周辺の立地や歴史的環境などを紹介し、あわせて出土木簡の事例報告および木簡や遺跡に関わる諸史料の提示により、本遺跡および出土木簡の理解を深めることを意図したものである。

さらに、研究成果を用いた公出挙制関連論文として、山本祥隆「公廩二題 律令国家地方支配の転換点をめぐって」(佐藤信編『律令制と古代国家』吉川弘文館、2018 年 3 月) を発表した。本稿は、公出挙制の一部をなすいわゆる公廩稲制度の沿革をトレースし、またそれと密接に関わる大宰府管内諸国における各種「公廩」についての考察を総合することにより、古代国家と地方社会の関わりのあるあり方に関する画期を明らかにしたものである。熟覧調査にて実見した宮城県多賀城市・市川橋遺跡出土木簡にも言及している。また、特に大宰府管内諸国における各種「公廩」についての理解は、本研究の中で実施した福岡県太宰府市・大宰府跡の現地調査や出土木簡の熟覧調査にて得た知見に基づく部分も含まれる。なお付言すると、本稿は前述した学生時代以来の研究テーマの深化を目指した成果の一部でもある。

平城宮・京跡出土木簡などの調査・研究についても、山本祥隆「奈良・平城宮跡」(『木簡研究』38 号、2016 年 11 月) や山本祥隆「奈良・平城京跡」(『木簡研究』41 号、2019 年 11 月) などを執筆し、それらを奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査出土木簡概報(四十五)』(2020 年 3 月) に集成して公表するなど、比較研究の基盤整備を目指した。それらに拠りつつ、奈良文化財研究所編『木簡 古代からの便り』(岩波書店、2020 年 2 月) や佐藤信編『古代史講義【宮都篇】』(筑摩書房、2020 年 3 月) などの書籍、または山本祥隆「なんと美しき平城京 都づくりの日々の一コマ」(奈良文化財研究所第 118 回公開講演会、2016 年 6 月 18 日、於奈良文化財研究所) などの口頭報告(講演会) といった、種々の形式での成果発表に努めた。

関連テーマとの相互補完研究としては、主に年輪年代学的手法を応用した木簡研究が挙げられる。これは、分析対象が大型木製品に限定されがちであった年輪年代学の調査手法を、小型品を主とする木簡に対して積極的に適用することにより木簡研究の新たな可能性を模索するものであり、本研究で主要対象とした地方遺跡出土木簡も重要な分析対象と位置づけられる。この研究では木簡実物から抽出した年輪データが不可欠であり、本研究による木簡実物の熟覧調査の成果も大いに活用した。本研究とはもちろん、本務である平城宮・京跡出土木簡の調査・研究とも有機的なリンクを図りつつ、星野安治・浦蓉子・山本祥隆「年輪年代学的手法による木簡研究の可能性」(『木簡研究』40 号、2018 年 11 月) や山本祥隆・星野安治「年輪年代学的手法による平城京跡出土木簡の検討」(『奈良文化財研究所紀要 2017』2017 年 6 月) などの論考、星野安治・山本祥隆「平城京跡出土木簡の年輪年代学的手法による同一材の推定」(日本文化財科学会第 34 回大会ポスターセッション、2017 年 6 月 10・11 日、於東北芸術工科大学) や 星野安治・山本祥隆・桑田訓也「年輪年代学的手法による木簡の同一材推定」(第 68 回日本木材学会大会(京都大会)、2018 年 3 月 14 日、於京都府立大学) などの学会報告、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター編『埋蔵文化財ニュース 第 181 号 木簡の年輪年代学』(株式会社明新社、2020 年 3 月) などの書籍、といったさまざまな形態・媒体により調査成果を発信した。

以上が、本研究の主要な成果の概略である。当初計画していた日本古代の地方社会の実態解明について、一定の成果を挙げることができたものと思う。特に山本祥隆「古代木簡における「勝」の字体」(前掲)は、複数の地方遺跡出土木簡および平城宮跡出土木簡の横断的・総合的な調査・分析によって得られた知見であり、本研究ならではの成果と考える。また、山本祥隆「公廩二題」(前掲)も、国家側の視点から地方社会を照射することにより、地方社会の有り様やその変化および画期を究明したものであり、本研究の目的に適うものである。

また、平城宮・京跡出土木簡の調査・研究、および関連諸テーマの研究との有機的リンクを目指す試みは、当初予想していた以上の成果を挙げ得たと言えるであろう。本研究で得られた見通しも活かしながら、今後も同様の方向性に基づく研究の発展を図りたい。

一方、古代地方社会の実態解明については、資料の収集や調査に留まり、十分な分析に至っていない部分も残されている。本研究を通して得た経験を活かし、ひきつづき研究の深化を目指してゆく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 星野安治・桑田訓也・山本祥隆・浦蓉子	4. 巻
2. 論文標題 年輪年代学的手法による平城京跡出土木簡の検討 2 - 平城第524次調査出土削屑の続報 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2018	6. 最初と最後の頁 66・67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本祥隆	4. 巻 715
2. 論文標題 新刊の情報と紹介 佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 48～53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 星野安治・浦蓉子・山本祥隆	4. 巻 40
2. 論文標題 年輪年代学的手法による木簡研究の可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 木簡研究	6. 最初と最後の頁 115～130頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 星野安治・山本祥隆	4. 巻
2. 論文標題 年輪年代学的手法による平城京跡出土木簡の検討 平城第524次調査出土「皇」「太子」削屑の事例	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2017	6. 最初と最後の頁 46・47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本祥隆	4. 巻
2. 論文標題 公廨二題 律令国家地方支配の転換点をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 佐藤信編『律令制と古代国家』吉川弘文館	6. 最初と最後の頁 191～215
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 星野安治・浦蓉子・山本祥隆	4. 巻 31
2. 論文標題 年輪年代学的手法を用いた小型木製品の検討 平城宮・京跡出土斎串および木簡の事例	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 第31回日本植生史学会大会 (創立30周年記念大会) 要旨集	6. 最初と最後の頁 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本祥隆	4. 巻 38
2. 論文標題 奈良・平城宮跡	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 木簡研究	6. 最初と最後の頁 5・6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本祥隆	4. 巻
2. 論文標題 古代木簡にみえる「勝」の字体	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所2019	6. 最初と最後の頁 44・45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本祥隆	4. 巻 41
2. 論文標題 奈良・平城京跡	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 木簡研究	6. 最初と最後の頁 8・9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本祥隆・桑田訓也	4. 巻 41
2. 論文標題 奈良・平城宮跡	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 木簡研究	6. 最初と最後の頁 127～129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本祥隆	4. 巻 39
2. 論文標題 奈良・法華寺旧境内	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 木簡研究	6. 最初と最後の頁 17・18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑田訓也・山本祥隆	4. 巻 39
2. 論文標題 奈良・平城京跡(1)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 木簡研究	6. 最初と最後の頁 5～14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本祥隆
2. 発表標題 2018年全国出土の木簡
3. 学会等名 第40回木簡学会研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 星野安治・山本祥隆
2. 発表標題 平城京跡出土木簡の年輪年代学的手法による同一材の推定 「皇」「太子」削屑の事例を中心に
3. 学会等名 日本文化財科学会第34回大会ポスターセッション
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本祥隆
2. 発表標題 2017年全国出土の木簡
3. 学会等名 第39回木簡学会研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 星野安治・山本祥隆・桑田訓也
2. 発表標題 年輪年代学的手法による木簡の同一材推定
3. 学会等名 第68回日本木材学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 星野安治・浦蓉子・山本祥隆
2. 発表標題 年輪年代学的手法を用いた小型木製品の検討 - 平城宮・京跡出土斎串および木簡の事例 -
3. 学会等名 日本植生史学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 星野安治・浦蓉子・山本祥隆
2. 発表標題 年輪年代学的手法による木簡研究の可能性
3. 学会等名 第38回木簡学会研究集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 武田寛生・山本祥隆
2. 発表標題 静岡県尾羽廃寺跡の発掘調査と出土木簡
3. 学会等名 第41回木簡学会研究集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 奈良文化財研究所編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 能登印刷株式会社印刷	5. 総ページ数 16
3. 書名 地下の正倉院展 国宝 平城宮跡出土木簡	

1. 著者名 奈良文化財研究所	4. 発行年 2016年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 128
3. 書名 平城京のごみ図鑑	

1. 著者名 奈良文化財研究所	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 174
3. 書名 木簡 古代からの便り	

1. 著者名 佐藤 信	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 古代史講義【宮都篇】	

1. 著者名 奈良文化財研究所編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岡村印刷株式会社	5. 総ページ数 38
3. 書名 平城宮発掘調査出土木簡概報（四十五）	

1. 著者名 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 株式会社明新社	5. 総ページ数 8
3. 書名 埋蔵文化財ニュース 第181号 木簡の年輪年代学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----